

実践報告

外国語活動における ICT の効果的な利活用に関する実践

— 「5つのツール」を用いた分類と整理 —

松下 大介

A Report about Effective Using with Information and Communication Technology in English activities: Classifying and Organizing Activities with “5 tools”

Daisuke MATSUSHITA

【要約】総務省のGIGAスクール構想により、1人1台タブレットPCを用いた活動など、ICTの利活用が推進されている。本校でもいろいろな教科でICTを利活用した学習活動が多く設定されている。本実践報告では、東口（2020）のICTの「5つのツール」を参考に、外国語活動の中での活用例を分類し、整理する。

【キーワード】 外国語活動, ICT, 「5つのツール」

1. はじめに

本校外国語活動・外国語科では、学習指導要領にある「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、聞くこと、話すこと、書くこと、読むことを通して、主体的にコミュニケーションを図る素地...（中略）...を養うこと」（文部科学省，2019）を土台にし、「慣れ親しんだ語彙・表現を使って、身近で簡単な事柄についての自分の思いや考えを、内容や構成などを工夫しながら相手にわかりやすく表現しようとする能力の育成」（本校紀要第5号：201）を目指している。

その中で、外国語（以下、英語）という母国語と違う言語を用いて学習していく過程で、外国と空間的・時間的なズレがあり、児童にとっては場面や状況がかけ離れたものになっていることがある。そのため、「してみたい、言ってみたい」という気持ちが起こりにくくなることが考えられる。そこで、ICTの特徴を利用して、その空間的・時間的なズレを軽減し、児童に英語を使って活動する目的や場面、状況を把握しやすくし、英語を使って活動することを通して、英語の楽しさや自己肯定感を育むことができる外国語活動を目指す必要があると考える。

本実践報告では、ICTを利活用した活動の場面の実践例を紹介する。

2. 外国語活動・外国語科におけるICTについて

外国語活動・外国語科（以下、小学校外国語教育）では、時間的・空間的な理由から、ホンモノを提示することが難しい場面がある。そのため、ICTを便利なツールとして用いることが不可欠であると考えられる。東口（2020）は、紙と鉛筆でできることをそのままICTに置き換えてもあまり意味はないことや、授業づくりにおいても、子どもだけでなく教師にも創造性が求められると述べている。更に、「ICTを活用し世界観が広がることで、そこから英語を話す目的意識も高まり、子どもたちの授業に対する意

欲」(同上：11)にもつながる，と述べている。東口（2020）は，小学校外国語教育の授業で，「子どもの『楽しい!』を引き出し，コミュニケーションを豊かにするための ICT の活用方法」として，「提示ツール」「共有ツール」「発表ツール」「記録ツール」「通信ツール」という活用場面を5つ紹介している。本実践では，東口（2020）が述べる「5つのツール」の活用場面に当てはめて分類・整理し考えることとする。

3. 実践の概要

本項では，筆者が行った実践のいくつかを「5つのツール」に分類・整理し，児童がどのように活動に取り組んだかについて述べていく。

(1) 提示ツール

「提示ツール」は，「主に教師が ICT 機器を活用して子どもたちに音声や文字・イラストなどの様々な情報を提示するための方法」（東口，2020：12）で，効果的にインプットさせたり，学び合いの場面を効果的に作り出したり，楽しくアウトプットさせたりすることと想定している。

本実践では，「楽しくアウトプットさせる」活動例として，第4学年「紹介します！お気に入りの場所」（Let's Try! 2 Unit 7 参照）の表現の慣れ親しみを目的としたゲーム活動を挙げる（表1）。

表1 「提示ツール」としての活用場面：「道案内ゲーム」

時間	10分
ICT教材	カメラ（ビデオ）
英語表現	（方向）Go straight, Turn right(left), Go up(down), Stop, Go back
ねらい	ビデオの行動を予想し，目的地の教室まで道案内し，方向の表現に慣れ親しむ。
<p>(1) 活動（ゲーム）の流れ</p> <p>① 出発地点から目的地まで撮影する。</p> <p>② 電子黒板に，動画を提示する。（写真1）</p> <p>③ 教師が児童に尋ねながら（ゆさぶりながら），目的地まで道案内するように声掛けをする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>【児童とのやり取りの実際】</p> <p>T（教師）：Start at the entrance. Let's go to classroom. Go straight...</p> <p>C（児童）：Go straight. Stop, turn left. Go straight. Go up, go up... Stop.</p> <p>T: Turn right?</p> <p>C: No! Turn left.</p> <p>T: Good! Thank you.</p> </div> <p>(2) 活動のポイント</p> <p>声を出して道案内するだけでなく，指を向かう方向に差すジェスチャーや方向を示す掲示を取り入れると，言うことに戸惑う児童への支援になる。</p>	
 <p>写真1 実際の提示映像の一部</p>	
 <p>写真2 児童の活動の様子</p>	

実際に、方向を言うことに戸惑う児童がいた。そのため、表1(2)活動のポイントに記したように、実際に教室掲示を工夫したり、教師が案内の途中まで言い、その後を児童が続けて言うようにしたりした。そうすることで、方向の英語表現に慣れ親しむだけではなく、道案内の仕方も併せて慣れ親しむことができていた。活動中には、方向の英語表現を自然と口ずさみながら指を差す児童もいて、児童は集中して活動に取り組んでいたと考えられる。

(2) 共有ツール

このツールは、友達との意見や作品の共有や共同作業を容易になり、学び合いが促進されることで思考を広げたり深めたりすることができる。更には、自分の表現や考えを見つめ直すきっかけにもなると東口(2020)述べている。加えて、東口(2020)は、共有ツールを活用すると、①自然な対話を生み出すことができる、②自尊心や他者理解を高めることができる、③主体性・協働性を活性化させることができる、⑤海外を身近に感じさせることができるという5点のことができるとしている。

本実践では、「共有ツール」を通して「④英語表現や考えを見つめ直すことができる」点について、第4学年「友達の好きな時間を紹介しよう」(Let's Try! 2 Unit 4 参照)の応用的な時間として行った活動の一場面(表2)を挙げる。

表2 「共有ツール」としての活用場面：音声認識機能を使った世界の時刻調べ

時間	25分
ICT教材	Googleの音声検索機能
英語表現	What time is it in (国名)?
ねらい	それまで慣れ親しんできた時刻を尋ねる表現を用いて、世界の時刻を調べ、日本との時差に気付く。

(1) 活動の流れ

- ① 電子黒板に、教師用タブレットPCを提示し音声検索の方法等を例示する。
- ② 児童がペアで協力してワークシートの国や地域の現在時刻を調べる。(写真3)

【児童同士の活動の実際】

C1: What time is it in ... デオデジャネイロ?
 C2: リオデジャネイロだよ。
 C1: What's time is it in Rio de Janeiro?
 C2: What time is it だよ。
 C1: What time is it in Rio de Janeiro?
 ... あ!時刻が出てきた(表示された)!

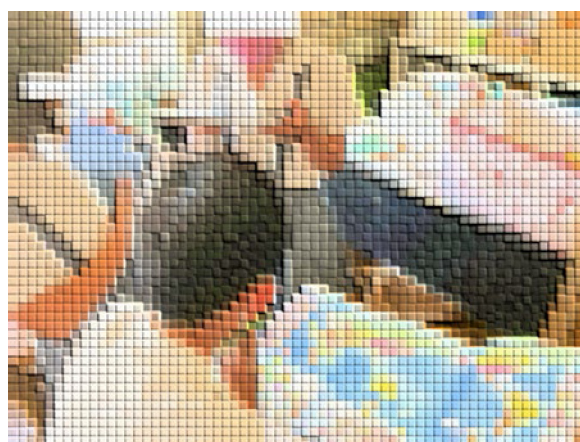


写真3 児童の活動の様子

(2) 活動のポイント

ワークシートと地図帳を併用し、タブレットPCだけではなく記録する媒体があることで、活動したことが残り、児童の達成感を促すことにつながると考える。ALTがいると、言うことに戸惑う児童へ個別に対応し、発話の練習ができるため、児童は安心して活動に取り組むことができる。

実際の様子、また、写真3や児童同士の会話の内容から、児童は慣れ親しんだ表現を使って何とかして時刻を調べようと、活動に主体的に取り組む姿が見られた。タブレットPCを用いることで、発音が違ったりタブレットPCが違うように認識したりしても恥ずかしがらず繰り返したり、友達からのアドバイスを受け入れたりしている姿も見られた。このことから、児童は「主体的・対話的」な学びを行うことができた、又は、「主体的・対話的」な学びに向かうことができたと考える。

(3) 発表ツール

東口(2020)は、発表の際にICTを使うと、話し手は楽しく発表でき、聞き手も食い入るように聞けることができると述べている。確かに、発表を分かりやすくする道具の一つとしてICTを用いることは話し手にとっても聞き手にとっても効果的であると考えられる。

そこで、タブレットPCを「発表ツール」として活用した実践として、第4学年(「紹介します!お気に入りの場所」(Let's Try! 2 Unit 8 参照))の発表場面(表3)を挙げる。

表3 「発表ツール」としての活用場面：お気に入りの場所の紹介

時間	15分
ICT教材	撮影：カメラ機能，提示：パワーポイント
英語表現	I like ~(the best/ very much).
ねらい	校内のお気に入りの場所を友達に紹介する。

(1) 活動の流れ

① 自分のお気に入りの場所とその理由となるもの(場所)の写真を撮り、パワーポイント(スライド)に貼り付ける。

② どのようにやり取りするか、どんな表現を使うかを児童と一緒に考え、表現を共有する。

③ ペアを組み、児童同士でお気に入りの場所を紹介する。(写真4)

【児童の活動の実際】

C1: Hello. Start at classroom.
... (道案内は省略) ...

C2: Playground?

C1: I like playground.

C2: Why?

C1: I like soccer.

C2: Good! Me, too.

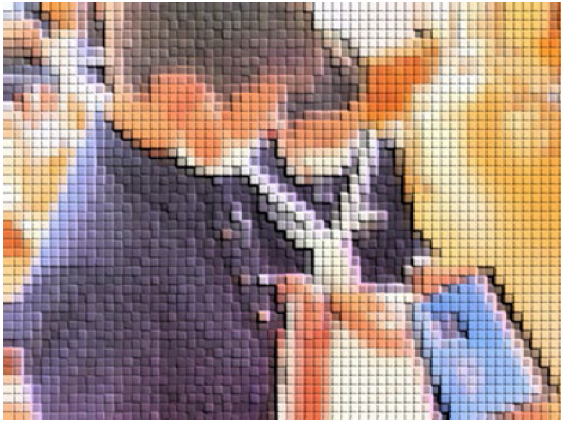


写真4 児童の活動の様子

(2) 活動のポイント

スライドには文字を入れないようにする。また、言うことに戸惑う児童へは、画面を見せながら、児童の知っている表現で何とか説明できないか尋ねたり一緒に考えたりする。又は、画面を見せ、指差しながら、“this”と言っても通じそうという児童は安心して活動に取り組むことができる。

文字を入れると、これまでの筆者の経験から、話者は読もうとして視線が聞き手に向かない。聞き手においても話者を見ずに文字を読もうとして発表の内容が聞こえづらくなる。更に、活字体の“a”の形を見慣れてしまい、書く際の弊害になりうると考えるため、文字の使用を控えさせるようにする。

タブレット PC が導入された当初は、機器に関する児童の関心が強く、作業に時間がかかってしまい活動のねらいまで達しなかった。しかし、何度もいろいろな教科や場面で使用することで、作業がスムーズになったり、指示が上手に通ったりするようになり、活動のねらいまで到達しやすくなった。

東口（2020）は、発表ツールとして活用することで、「英文の意味を理解させて発表させる」や「リアリティから意欲につなげる」、「主体的な発表につなげる」ということができる」と述べている。ただし、「英文の意味を理解させて発表させる」については、学習指導要領（2019）にもあるように、文字認識については個人差があり、文字にも馴染みの少ない中学年においては「文字の名称レベルの指導に留めることに留意する必要がある」（文部科学省，2019：50）ことから、英文の意味の理解は適さないと考える。更に、前に述べたように、文字があることでコミュニケーションとして成立しにくくなるのではないかと考える。このことから、小学校外国語教育の段階での「英文の意味の理解」についての項目は適しないと捉える。

本実践については、他に第4学年の別の単元や授業の中で活用したり、第3学年（「アルファベットであそぼう」（Let's Try! 1 Unit 6 参照））でも活用したりした。（第3学年の実践については、「記録ツール」で紹介する。）

（4）記録ツール

「記録ツール」については、「共有ツール」や「発表ツール」と関連すると考える。東口（2020）は、「記録ツール」について、ICT利活用の1つの利点である写真や動画を撮り、蓄積できることを挙げている。ただし、同時に東口（2020）が述べているように、何も考えずに手当たり次第に撮影したり、ただ撮影してそれを使った活動をしなかったりすると何の学びも得られない。「子どもたちが記録することで、それをきっかけに英語の学びに結びつくような活用をすることが大切」（東口，2020：18）である。「記録ツール」を通して、教室にはないものを紹介させたり、自分の英語表現を見つめ直させたりすることで英語の学びに結びつくと考え。これらは、文化への気付きや表現の慣れ親しみといった知識・技能に関するものと捉えられる。一方、振り返りから次につなげたり、デジタルポートフォリオとして活用したりすることで、児童の主体的に学習に取り組む態度を見取ることができ、教師の授業改善につなげたり、評価の判断材料にも活用したりできると考える。

活動については、第3学年「アルファベットであそぼう」（Let's Try! 1 Unit 6 参照）の実践を挙げる。本来なら校内でアルファベットに見える形やものの撮影を個人で行い、その後児童同士でクイズ形式を用いて共有しようと考えていた。しかし、実際の活動では、児童らは、撮影の段階で表4の【児童同士の活動の実際】のようにお互いにクイズを出し合ったりアドバイスをし合ったりして撮影していた（写真5）。撮影後には、計画していた通り、教室内でクイズ形式の紹介を行った。その際、話し手が予想していなかったアルファベットを聞き手が見いだしたり、友達と同じ場所で撮影しても見方の違いで互いに違うアルファベットを伝えたりしていた。児童の振り返りの記述（資料1）からも同様の気付きが多く見られた。

- ・ぼくと A くんと同じ場所をとったのに、A くんは「Y」（という文字）を見つけていてすごいなあと思いました。
- ・わたしは B さんと一っしょにアルファベットをさがしました。とりながら2人で問題を出しながら見つけました。楽しかったです。
- ・学校にもいろんなアルファベットがかくれているんだなあと思いました。

（筆者が一部修正）

表4 「記録ツール」としての活用場面：校内で見つけたアルファベットの紹介

時間	15分
ICT教材	撮影：カメラ機能
英語表現	What's this? – It's "(A)."/ Do you have "(A)"? – Yes. That's right. / No, sorry.
ねらい	校内で見つけたアルファベットに見える形や模様を友達に紹介する。
<p>(1) 活動の流れ</p> <p>① 電子黒板に、教師用タブレット PC を提示し音声検索を例示する。</p> <p>② 児童がペアで協力してワークシートの国や地域の現在時刻を調べる。(写真5)</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>【児童同士の活動の実際】</p> <p>C1: What's this?</p> <p>C2: A?</p> <p>C1: No, sorry.</p> <p>C2: X?</p> <p>C1: Yes, that's right.</p> <p>C2: こう見たら、T にも見えるよ。</p> <p>C1: なるほど。</p> </div> <p>(2) 活動のポイント</p> <p>活動の前に、HRT と ALT が事前に準備していた写真を使ってデモンストレーションをすることで、児童は活動の内容を理解し、活動への意欲を高めることができる。アルファベットを探すことに戸惑う児童へは個別に対応し、教師が対象を指差したりヒントを言ったりして、アルファベットを見つけられるようにする。</p>	

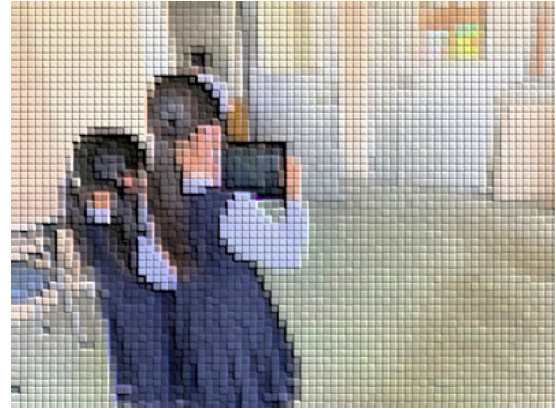


写真5 児童の活動の様子

(5) 通信ツール

東口 (2020) は、この「通信ツール」が ICT の一番の利点だと述べている。確かに、通信できることで、現在の状況においてはとても効果的な活用と言えるだろう。現地に行かなくても、そこに行ったような場面や状況を設定することができ、少々のタイムラグは生まれるが現地の人と会話ができる。実際にそれが可能になったことで、より容易に目的意識や相手意識が生まれると考える。東口 (2020) は、「通信ツール」としての ICT の可能性を、個人や小グループで海外とつながること、学校単位でつながること、身近な友だちとつながることの3点を挙げている。これまでは、一つ目の海外とのつながりに焦点が当たっていたような状況であったが、現在の状況下では、学校単位や身近な友達とつながることも ICT の可能性を広げる要素になっていると考える。相手は海外にいる人だけではなく、国内、県内、更には、同じ地域にいる人とも自分の教室や家において活動を共にすることができるようになる。

本実践では、学校単位でのつながりに焦点を当て、第4学年「紹介します！お気に入りの場所」(Let's Try! 2 Unit 8 参照) で、実際に「Teams」というアプリを用いて県内の Z 小学校と行った交流活動を挙げる(表5)。本活動は、単元のゴールとして設定した活動であり、児童は「どのように言えば画面の向こうにいる Z 学校の友達に伝わるか」という相手意識をもって、それまでの活動に取り組んでいた。実際には、互いの学校の通信環境の違いや調子等を理由に、全員がスムーズに行うことができたとは言えないが、その中でもそれぞれの児童が「何とかして自分のお気に入りの場所を紹介したい」という粘り強く、目的意識をもって取り組むことができていたことは成果の一つと言える。

表5 「通信ツール」としての活用場面：他校の児童への紹介

時間	25分
ICT教材	Teams（通信アプリ）
英語表現	I like ~ (the best/ very much). Why? Good./ Nice などの反応の表現
ねらい	他校の友達に自分のお気に入りの場所を分かりやすく紹介する。
<p>(1) 活動の流れ</p> <p>① Teams の会議の中の「ブレイクアウトルーム」機能を用いて相互の学校のグループが1対1になるように設定する。</p> <p>② 児童が相手校の児童にお気に入りの場所を紹介する。</p> <p>(写真6)</p>	
<p>(2) 活動のポイント</p> <p>実際に現場での対面ではないため、「どのように資料を提示するか」という資料の見せ方についても児童同士で考える場面が必要である。また、実際にどのように見えるかイメージさせたり改善点を見いだしたりできるようにするために、本番のような環境や場面を作り、学級で練習する。</p> <p>発表に戸惑う児童へは個別やグループ毎に対応し、これまでの学習を振り返ったり同じグループの児童に尋ねたりして、児童の使いたい表現や伝えたい内容を確認する。</p>	

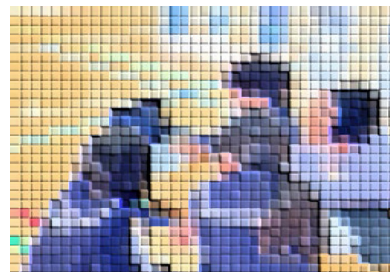


写真6 児童の活動の様子

この活動に至るまでに、Z小学校の教員とメールで活動案や教材等を共有したり、Teamsを使って数回打ち合わせを行ったりした。児童のやり取りだけではなく教師もこの「通信ツール」を活用することで、単元を通して児童も教師もICTを利活用する実践となった。

4. おわりに

本実践報告では、今年度（令和3年度）の4月から11月までに筆者が外国語活動において行ったICTを利活用した実践の主なもののみを、東口（2020）の「5つのツール」を参考に分類・整理を行った。実際に、これまで実践してきたことを整理していく中で、「発表ツール」としての利用が多かった。理由として考えられるのは、これまでは教師が児童の必要なものを聞いて準備していた画像を、児童がそれぞれの目的に合わせて材料を考えて選び、準備することが容易に出来るということが挙げられる。ICTは、外国語活動において、目的や場面、状況を設定しやすく、相手意識や目的意識をもたせることを可能にする学習ツールであると言えるだろう。今後も継続して、小学校外国語教育において、より効果的なICTの利活用について探っていきたい。また、このICTの利活用が児童のよりよい学びに結びつくように常に内容や方法を考えて実践を重ねていきたい。

〈引用・参考文献〉

- 佐賀大学教育学部附属小中学校, 2020, 『研究紀要 第5号』。
- 中川一史, 2020, 「教育の情報化促進の鍵は何か」(日本教育情報化振興会主催「学校とICTフォーラム 東京」資料)。
- 東口貴彰, 2020, 『小学校英語×ICT 「楽しい!」を引き出す活動アイデア 60』 明治図書。
- 文部科学省, 2019, 『小学校学習指導要領解説 外国語・外国語活動編』 開隆堂。